

はじめに「高野山」という空間

高野山（和歌山県伊都郡高野町）は、標高一〇〇〇メートル前後の峰々と、それらに囲まれた標高八〇〇メートルほどの盆地状の平坦地の総称である。平坦地は東西六キロ、南北三キロの広がりを持ち、その中央部を西から東に御殿川が貫流する。西部に壇上伽藍、東部に奥之院があり、壇上伽藍・奥之院を除く平坦地には、高野十谷と呼ばれる谷々が展開している。

一・空海の高野山開創

高野山の歴史は、弘仁七年（八一六）に、弘法大師空海（七七四―八三五）が、現在の壇上伽藍の地に「修禪の寺院」金剛峯寺を建立した時から始まる。同年六月の「沙門空海書状（布勢海あて）」（『高野雑筆集』巻上）には、「諸天（神々）の威光を増益し、国界（国家）を擁護し、衆生（生きとし生けるもの）を利済せんがために、一つの禪院を建立し、法によって修行せん」と、その建立目的が記されている。

二・撰関家・王家の高野参詣

空海（歴史的な存在）が高野山で入滅してから二、三〇〇年後の撰関・院政期、治安三年（一〇二三）の前太政大臣藤原道長の「弘法大師廟堂」参詣

を初例として、撰関家・王家の人々が、続々と高野登山を行い、その都度、金剛峯寺に荘園・堂塔・子院（本寺に付属する小寺）を寄進・造立した。十世紀に一時、衰微していた高野山であったが、この撰関・院政期に至るや、にわかには活況を呈してきたのである。

撰関家・王家の人々の高野登山をうながしたのは、十一世紀以降、しだいに流布しはじめた入定信仰と高野山信仰であった。入定信仰とは、弘法大師（霊的な存在）が今もなお高野山奥之院の御廟内に生身のままでおわさっていて、五十六億七千万年後に弥勒菩薩がこの世に出現されるその時まで、人々を救済し続けている、という信仰のことである。また高野山信仰とは、「一度参詣高野山、無始罪障道中滅」（『高野山秘記』）という言葉に端的に示されているように、高野山は仏の浄土であり、その地に徒歩で一度でも参詣するならば、人間に最初から備わっているといわれる逃れがたい罪までもが道中で消滅して、清らかな心身になることができる、という信仰のことである。

撰関家・王家の人々は、このような二つの信仰を胸に抱いて、「大和路」または「和泉路」、または「河内路」を経由して高野山麓の高野政所（伊都郡九度山町慈尊院）に至り、そこから、のちに町石道と呼ばれる険しい表参道を徒歩でよじ登り、敬虔な気持ち

鉄道の未来学

基調報告 — 34

1200年もの長きにわたる歴史を有する高野山。
真言密教の聖地であり、祈りに満ちた霊山。
学問・修行の場であり、暮らしの場でもある。
時の流れとともに変わったもの、変わらないもの——
「高野山」の魅力とは、何なのだろうか。

高野山大学 名誉教授

山陰加春夫

Kazuo YAMAKAGE

大阪市立大学文学部史学地理学科卒業。大阪市立大学大学院、高野山大学大学院を経て、高野山大学文学部教授、文学博士（大阪市立大学）。平成22年4月1日より現職。専門は日本中世史。著書に『中世高野山史の研究』『高野への道』（共著）『和歌山・高野山と紀の川』（共著）『中世寺院と「悪党」』『巡礼高野山』（共著）などがある。

世界遺産・高野山への旅

——聖地でありつづける高野山の魅力——

撮影●織本知之

これらの挿話群は、十三世紀以降、人口に膾炙しつづつあった入定信仰と高野山信仰を前提として（または、入定信仰と高野山信仰のさらなる流布を企図して）構成されていると言うことが

『平家物語』は、一二四〇年代ごろにはその原形ができていたといわれる軍記物語。その中に、(一)一ノ谷で平敦盛を討たざるをえなかった熊谷直実が、蓮花谷に住んで敦盛の後世を弔った話（延慶本・第五本「敦盛被討給事、付敦盛頸八嶋へ送事」、(二)横笛との恋が叶わず出家した滝口入道（斎藤時頼）が、清浄心院谷に居を構え修業に専心した話（覚一本・巻十「横笛」等々、高野山に関係する印象的なエピソードが鏤められている。

三、『平家物語』と高野山

で山上の弘法大師御廟に詣でた。それらの人々の高野参詣の主たる目的は、御廟参拝を行い、自身とその一族の現世安穩（この世を安らかに暮らすこと）と後生善処（来世に阿弥陀如来または弥勒菩薩の浄土に生まれること）を念じることであった。けれども、彼らは、高野山への道中そのものにも、「無始罪障道中滅」という切実な願いを込めていた。彼らにとって、高野山に至る道筋は、目的地に到達するための単なる通過ルートではなく、自身を浄化していく大切な道程であったのである。

できよう。延慶本・第三本「白河院、祈親持経（聖人）ノ再誕ノ事」には、入定信仰について、

我が朝高野の御山に、目の当たり生身の大師入定しておはします。

（中略）生身普遍して、慈尊の出世を待ち、六情（喜怒哀楽愛惡の六種の情）変はらずして、祈念の法音を聞こし召す。この故に現世の利生も憑みあり。後生の引導も疑ひなし、

と記され、また高野山信仰について、一度もこの地を踏む者は、界外無漏の功德（現実を超越した清らかな最上の功德）を備へて、四重五逆の罪障を滅ぼす。一夜も彼の山に宿る者は、本有万陀羅界会を開きて（生まれつき具わっている仏性が顕現して）、三十七尊の尊位に連なる（仏になることができる）、と載せられている。

このうち、「一夜も彼の山に宿る者は、本有万陀羅界会を開きて、三十七尊の尊位に連なる」という一節は誠に興味深い。高野山で静かに一泊することにも重要な意味があることを教えてくれているからである。

十三世紀後半以降になると、『平家物語』で典型的に説かれる功德の喧伝等が功を奏してか、庶民の高野参詣が増えはじめ、高野山上には宿坊となる子院が増加していく。同時に、のちに「高野七口」と呼ばれる高野街道群も



「壇上伽藍」胎藏曼荼羅の世界を表しているといわれる



九度山の慈尊院から大門へ通じる「町石道」



大塔の鐘・高野四郎。1日に5回、高野山内に時刻を知らせる

整備されていく。

十六世紀ごろには、高野山への納骨もいっそう盛んになったようである。天文元年（一五三二）成立の百科事典『塵添瑤囊鈔』巻十六にも、「骨を専ら高野に納むるの事」という一項が設けられている。

四、江戸時代の高野山

江戸時代の高野山は、（一）空海が建立した「修禪の寺院」そのものである壇上伽藍を本部とした「学問の道場」であり、（二）奥之院の弘法大師御廟を中心とした日本有数の「信仰の霊場」であり、（三）高野十谷と呼ばれる谷々に僧侶・俗人の男性だけが集住する「聖俗空間（聖にして俗、俗にして聖なる

地域）」であり、そして（四）高野山麓に二万二三〇〇石の寺領（朱印地）を有する宗教領主（江戸に参勤交代を行う日本最大の大名格寺院であった。（一）について、イエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエル（一五〇六―五二）は、その手紙の中で、高野山が「中世日本の六大学」の一つである旨を記している。また（二）について、同じイエズス会の宣教師ルイス・フロイス（一五三二―一九七）は、その著『日本史』において、「（高野山は）日本中でもっとも多くの人々が参詣する巡礼地の一つである」と述べている。さらに（三）に関連して、正保三年（一六四六）の「高野山全山絵図」（金剛峯寺所蔵）は、壇上伽藍を中心にして、実に一八六五もの子院を描いてい

る。各子院は、本中院谷を初めとする谷々に分布し、それぞれの谷は独自の湯屋と集会所を持つ、一種の「まち」組織を形成していた。また、現在のメイン・ストリートである小田原通りに、すでに「店として商人に貸与する貸長屋群」が建ち並んでいたであろうことも見て取れる。

五、貝原益軒の物見遊山とその後

元禄二年（一六八九）二月十七、十八の両日、儒学者貝原益軒（一六三〇―一七一四）は、一泊二日の日程で高野山に登った。信仰のかけらもない、文字通りの物見遊山（名所見物）である。彼は持ち前の合理的精神をもって、同山の様子を次のように記してい

る（「三巳紀行」）。

凡、寺院三千余坊ありと云。さほどは有べからず。然共、山中甚広大也。商家、亦多し。商人も皆妻を養はず。魚肉を食せず。寺院并、商家ある所は、西より東へ長き谷也。両方に山有て他山見え。故に山中、風景よからず。又、別にことなる佳境なし。只、寺院多く、又町には万のうり物多く、物を買求るに自由也。かねて「寂寞冷淡の所ならん」と思ひしに、左はなくて繁栄富饒の地なり。

和歌浦や吉野の桜などの風趣をことさら愛でる益軒にとって、高野山は特に感慨を催す場所ではなかったようである。けれども、そのような益軒でさえ、同山が案に相違して「繁栄富饒の地」であることに驚きを隠せなかった。

ルイス・フロイスが、「（高野山は）日本中でもっとも多くの人々が参詣する巡礼地の一つである」と述べていることについては、すでに紹介した。十六世紀後半ごろ、高野山は日本有数の「信仰の霊場」となっていたわけであるが、江戸時代中期以降、同山を訪れる「多くの人々」の中には、貝原益軒のような物見遊山の旅人も相当数、含まれていたと推定される。

明治時代に入って、寺領（朱印地）がなくなり、女人禁制が解かれた。また、大正四（昭和五年）（一九一五―三〇）の大阪汐見橋―高野山駅間の鉄道敷設



一山の総門の大門。左右には金剛力士像が安置されている

南海難波駅（大阪市中央区）から南海高野線に乗ると、特急で約一時間二〇分、急行で約一時間五〇分かつて標高五三五メートルの極楽橋駅に着く。同駅でケーブルカーに乗り換え、最大斜度三〇度の急坂を登って、五分で標高八六七メートルの高野山駅（登録有形文化財）に到着。さらに同駅前から南海りんかんバスに乗り、林の中を抜けて、一〇分ほどで千手院橋バス停に到達する。そこは、『グリーン・ガイド』日本編（ミシユラン社・二〇〇九年）に、「印象深さ」という項目で三ツ星が付けられ、「浮世と全く違う時

や、昭和三十五年（一九六〇）の九度山町下古沢―高野山大門間の高野山有料道路開通は、高野山への旅に大いなる便宜を与えた。

『アサヒ写真ブック49 高野山』（朝日新聞社・一九五七年）には、

天下切つての大霊場を、一度は訪れておきたい人もはるばると諸国から上つて来る。お大師さまに凝りかたまつた信仰のお山が、やがては「名所」としての性格も重なるのは必定ではないか。いわんや、夏の涼しさは文字どおりの冷房高

おわりに―高野山の魅力―

野だし、秋の大紅葉も目を奪う山塊であつてみれば、京阪神からの足もおのずからここへ向つて来る。高野山への一日の散歩さへあらわれるとなると、「名所」はさらに今どき流行の「観光地」にまで発展する。

とある。この記述の限りでは、高野山が、「信仰のお山」から「名所」へ、さらには特に高度成長期以降「観光地」へと、その基本的な性格を変えていつていくことがうかがわれよう。

間が流れている。森の中を行くと伽藍が現れる。西洋人にとってまさに神秘的」と評価された世界遺産・高野山の中央部である。上方落語屈指の大ネタ「地獄八景亡者戯」では、三途の川を渡り向こう岸に上がると、六道の辻と呼ばれる、大阪ミナミと見まがうばかりの繁華街が出現するが、それに似たような感覚を味わえる場所が高野山である。「現世の森の中に忽然と現れる彼の世（異空間）」、私たちが同山を訪れて味わう一種、幻想的な感覚をこのように言い換えることもできよう。

この不思議な感覚は、今なお高野山が、（一）「学問の道場」であり、（二）「信仰の霊場」であり、そして（三）僧侶・俗人（今は男性と女性）が集住する「聖俗空間」であるという、複合的な性格がもたらすものであろう。したがって、大自然の中に（一）（二）（三）三者が渾然一体となつて存在するところに、同山の最大の魅力があるということができるのではないだろうか。

前に、『アサヒ写真ブック49 高野山』の記述の限りでは、高野山が「信仰のお山」から「名所」へ、さらには特に高度成長期以降「観光地」へと、その基本的な性格を変えていつていることがうかがわれよう、と述べた。けれども、必ずしもそうでは

あるまい。「名所」見物であれ、高野山観光であれ、同山を訪れる人々に新鮮な驚きをもつてもたらされるのは、前述した「幻想的な感覚」である。高野山の風物にじっと眼を凝らして、その不思議な感覚の在処を尋ねる時、同山に「学問」と「信仰」が一二〇〇年の長きにわたって息づいていることに気づく。「名所」見物の旅人も、観光目的の若者たちも、耳を澄ましさえすれば、そこが紛れもなく「学問と信仰のお山」であることがわかるのである。



吉田初三郎『常喜院を中心とする高野山図絵繪葉書』（昭和9年発行）